

スポーツ実施の社会的要因に関する一考察 —学生のスポートクラブ加入行動の側面から—

渋谷崇行* 小泉昌幸** 伊藤巨志***

(平成9年10月31日 受理)

A Study of Sociological Factor about Sport Participation

Takayuki SHIBUKURA * Masayuki KOIZUMI ** Kiyoshi ITOH ***

The purpose of this study is to clarify the relationships among the student' value-orientation toward sport, their wish to join the sports club in college and their experience of the physical education class in the past. In order to determine these assignments, questionnaire was administered to five hundred and fourteen male and female college students.

The main results were as follows:

- 1.The participation of the sports club tends to decrease as they grow older in a schools.
- 2.Those who wish to join the sports club in college value sport higher more than who do not.
3. Those who wish to join the sports club in college are more interested in taking part in the sports event and more positive in the secondary involvement in sport than who do not.
- 4.The experience of the physical education class provides a significant opportunity to prompt their participation in the sport club in college.

Key words : sports club, physical education, value-orientation

1. はじめに

今日では、多くの人がスポーツをしたり、観たり、話題にしている。人間は生まれてからその成長過程において、スポーツと何らかのかたちで接し、スポーツに興味をもち、あるいは嫌悪感を抱いたりして、自分のスポーツに対する態度、価値を形成していると考えられる。

人がなぜスポーツをするようになるのか、あるいは、どのようにしてスポーツに対する態度、役割を獲得し、価値を見出していくのかを解明していくことは、スポーツへの社会化研究の主要な課題といえる。

スポーツへの社会化がスポーツ参加率上昇のプロセスとなるためには、人間があるスポーツに出会い、それにより関心を高め、実際に参加を試みる必要がある。そして、他者や環境等との相互作用をとおして、他者の期待や社会の規範を主体的に受けとめ、解釈し修正する⁴⁾。その過程でスポーツの価値が付与されることにより、主体である人間は、スポーツの積極的参加者となりうるのである。また、積極的参加者のもつ価値は、相互作用の過程でシンボルとして社会的に共有され、他者はその過程を繰り返すことになる。以上は、個人のスポーツ参加への意志決定とその社会的ひろがりの過程である。

人間のスポーツ参加には、仲間(クラブ)、指導者などの重要な他者の存在、余暇、施設等の社会的条件と正の関係があるといえる。スポーツ実施に関しては過去のスポーツクラブ所属経験の重要性を指摘する報告も多くあり^{3, 6, 7, 11, 12)}、体育授業の経験についても、その愛好度を高めることや喜びの体験は、生涯スポーツへ結びつく重要な要素である⁹⁾。また2次的スポーツ

* 体育学 助手 ** 体育学 助教授 *** 県立新潟女子短期大学 講師

参与についてもスポーツへの社会化のエージェントとして強い影響を及ぼしている^{5, 8, 10)}。つまり、スポーツ実施を規定するこれらの要因は、生涯を通じてスポーツに親しむことのできる態度の育成のために重要な意味をもつものといえよう。

本研究では、学生のスポーツ実施行動における社会学的要因を明らかにすることを目的とし、スポーツに関する価値意識、過去の体育授業経験、地域のスポーツプログラムへの参加希望、及び2次的スポーツ参与に焦点をあて、スポーツクラブ加入希望の側面から分析を試みた。

2. 研究の方法

本研究の目的に合致する調査票を作成し、質問紙法による調査を1997年4月に行った。調査対象者は、新潟県内の2大学に在籍する新入生658名で、授業時間（年度始めのガイダンス）を利用し調査者が説明をしながら実施した。調査の内容は、過去及び現在のスポーツ参与状況、スポーツに対する価値意識等についてであった。有効回収数は514（男子211、女子303）、有効回収率は78.1%であった。

3. 結果及び考察

3.1 過去のスポーツクラブ加入状況、及び今後の加入希望

Fig.1は、小学校、中学校、高等学校のそれぞれの時期における、調査対象者のスポーツクラブ加入状況の割合を示したものであり、Fig.2は今後のスポーツクラブ加入希望の割合を示したものである。なお、スポーツクラブとは、ここでは学内の部活動に学外のスポーツクラブを含めたものをいう。

それぞれの時期におけるスポーツクラブの加入率は、小学校期は男子84.8%、女子76.2%、中学校期は男子92.9%、女子71.6%、高等学校期は男子58.1%、女子36.4%であった。また、今後のスポーツクラブ加入希望率は、男子35.5%、女子30.7%であった。

クラブの加入率は、いずれの時期においても男子の方が女子を上回っているようである。また、高等学校期には男女とも著しい低下の傾向を示しており、大学期に入ってもスポーツクラブ離れの傾向は益々強くなってきている。この原因としては、通学時間の増大や学業との両立の問題、また競技力の未熟さの認識や他の関心事への導引などによる離脱が考えられよう。海老原²⁾の研究でも中・高生のドロップアウトの原因として人間関係、競争性、受験をあげている。この

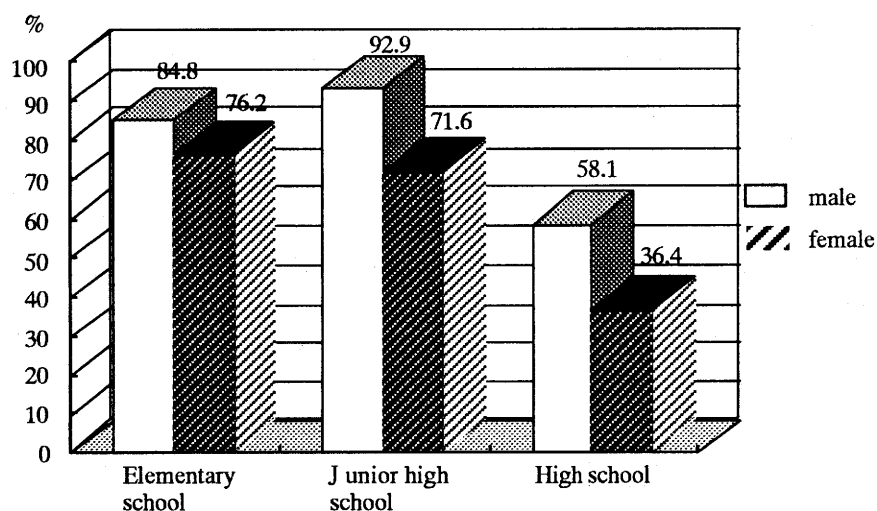
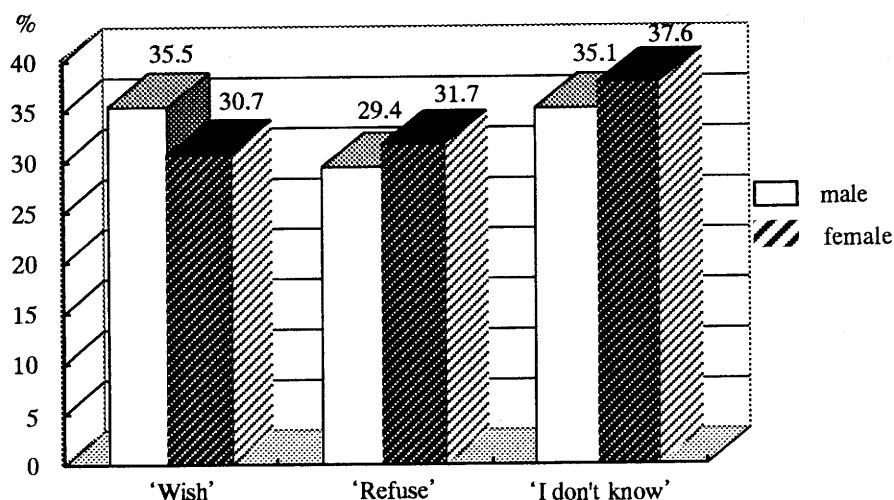


Fig.1 The rate of the participation of the sports club in the past

ような原因によるスポーツからの離脱は、大学期においても容易に考えられ、本研究においても同様の傾向がみられた。また荒井¹⁾は、進学するにつれて低下してゆくクラブの加入率について、スポーツ活動の専門化をあげている。



特に高等学校期におけるスポーツ活動については、一部の生徒が専門的に享受する状況が生じていると報告しており、全ての者がスポーツ実施に対して平等でないことを示唆している。

Fig.2 The rate of those wishing to join in the sports club in college

ていくクラブの加入率は、他の社会的現象、つまり個人をとりまく環境に影響されるものといえるが、以下では、クラブ加入行動について、スポーツに関する価値意識、過去の体育授業経験、地域におけるスポーツ参加、及び2次的スポーツ参与の側面から検討を試みる。

3.2 スポーツクラブ加入希望とスポーツに関する価値意識

Table1 は、スポーツに関する価値意識について操作的に12項目であらわし、それぞれの価値項目に対して「非常に認める」を5、「やや認める」を4、「どちらともいえない」を3、「あ

Table1 Value-orientation toward sport

Variable	Group	Measure(%)					Chi-square
		1	2	3	4	5	
Physical strength	Wish	0.6	0.6	3.0	28.1	67.7	$\chi^2=9.557$
	Refuse	0.6	5.1	5.1	33.8	55.4	$p<0.05$
Health	Wish	0.6	0.0	5.4	22.8	71.3	$\chi^2=3.996$
	Refuse	0.0	1.3	5.1	27.2	66.5	n.s.
Spiritual strength	Wish	1.2	1.2	11.4	37.1	49.1	$\chi^2=12.884$
	Refuse	1.3	6.4	20.4	35.0	36.9	$p<0.05$
Humanity	Wish	1.8	1.2	26.5	38.6	31.9	$\chi^2=25.160$
	Refuse	6.4	9.6	36.5	23.7	23.7	$p<0.001$
Sociality	Wish	2.4	4.8	32.3	38.3	22.2	$\chi^2=10.556$
	Refuse	5.1	12.2	34.0	35.3	13.5	$p<0.05$
Skill	Wish	0.0	3.6	11.4	45.5	39.5	$\chi^2=11.291$
	Refuse	2.6	5.1	20.5	41.7	30.1	$p<0.05$
Pleasure	Wish	0.0	0.0	3.6	26.1	70.3	$\chi^2=18.695$
	Refuse	1.3	3.8	11.5	29.3	54.1	$p<0.001$
Record	Wish	6.6	11.4	41.0	31.3	9.6	$\chi^2=13.146$
	Refuse	14.6	20.4	36.3	22.9	5.7	$p<0.05$
Participation in competition	Wish	5.4	7.8	42.2	30.1	14.5	$\chi^2=21.426$
	Refuse	14.6	19.1	37.6	21.7	7.0	$p<0.001$
Attraction	Wish	9.0	14.4	35.3	32.3	9.0	$\chi^2=7.307$
	Refuse	13.4	19.7	38.9	21.0	7.0	n.s.
Leadership	Wish	7.2	13.8	47.9	21.6	9.6	$\chi^2=13.749$
	Refuse	14.6	22.3	42.0	17.8	3.2	$p<0.01$
Win	Wish	4.2	12.0	34.1	26.3	23.4	$\chi^2=10.256$
	Refuse	12.1	10.8	35.0	28.0	14.0	$p<0.05$

まり認めない」を2, 「ほとんど認めない」を1とした5段階評定により回答を求め、今後のスポーツクラブ加入希望の有無により比較したものである。なお、今後のスポーツクラブ加入希望に対して「わからない」と回答した者は分析の対象から外し, 「希望する」及び「希望しない」に回答した326名について分析を行った。以下, スポーツクラブに加入を希望する者を加入希望群(N=168), 希望しない者を加入拒否群(N=158)と呼ぶ。

12の価値項目のうち「健康」「カッコ良さ」を除く10項目において, 加入希望群の方が加入拒否群よりも価値を認めている割合が有意に高かった。「健康」「カッコ良さ」の項目において差がみられなかった点については, 項目としての内容が極めて一般的であったことがあげられる。5段階評定におけるこれらの平均得点は, 前者が最も高く(4.62), 後者は最低を示した(3.04)。

大学生がスポーツクラブに加入しようとする際には, こうしたスポーツに関する価値意識が深く関わっていると考えられる。つまり, スポーツの価値を自ら認めることにより, それがスポーツ活動への自発的な参加を促す直接的な動機となるということである。スポーツの価値認識は, 体験としてスポーツの特性に触れ, 味わうことなしにはより多くを知り得ない。スポーツ活動への自発的な参加は, 過去の豊かなスポーツ参与経験に裏付けされた価値意識の形成により実現するものといえる。

また, スポーツ活動経験は実施者の価値意識を再形成し, 次のステージにおけるスポーツ活動に何らかの影響を及ぼす⁶⁾。スポーツ実施を規定する要因の観点からは, スポーツに関する肯定的な価値意識の形成はもとより, 否定的な形成に関しても, スポーツ実施を妨げる要因として注目すべき点といえよう。

就学期においては, スポーツ価値意識の形成に及ぼす指導者の影響は大きい。特に, 部活動や体育授業の場においては, 彼らがスポーツの特性に十分親しむことのできるような配慮が必要といえる。

このように, 大学生がスポーツクラブに加入を希望する際には, スポーツに関する肯定的な価値認識を伴うことが確認された。

3.3 スポーツクラブ加入希望と過去の体育授業

Table2 Impression of physical education in the past				
Term	Group	Physical education(%)		Chi-square
		Like	Dislike	
Elementary school	Wish	74.4	25.6	$\chi^2=12.905$ $p<0.001$
	Refuse	55.4	44.6	
Junior high school	Wish	77.4	22.6	$\chi^2=31.772$ $p<0.001$
	Refuse	47.1	52.9	
High school	Wish	85.1	14.9	$\chi^2=48.293$ $p<0.001$
	Refuse	49.0	51.0	

Table2は, 小学校, 中学校, 高等学校のそれぞれの時期における, 体育授業の好き嫌いの割合について, 今後のスポーツクラブ加入希望の有無により比較したものである。

それぞれの時期における体育授業の好きだった者の割合は, 小学校期は, 加入希望群74.4%, 加入拒否群55.4%, 中学校期は, 加入希望群77.4%, 加入拒否群47.1%, 高等学校期は, 加入希望群85.1%, 加入拒否群49.0%であった。いずれの時期においても, 加入希望群は体育授業に対して好意的な態度を示していることがわかる。

結果のとおり, 過去の体育授業経験とスポーツクラブ加入希望との間には関連性が認められる。就学期における体育授業においては, 学習者のスポーツ欲求(関心・意欲)を喚起させることに重点が置かれるが, 自発的なスポーツ実施を実現するには, やはり体育授業の役割は極めて大きいといえる。必修である体育授業においてスポーツの特性に十分に触れさせ, その価値を学習者自らに認識させることは, 内発的動機づけによる, 日常生活におけるスポーツの実施を促すことができる重要な機会であるといえる。

また、加入拒否群においては、体育授業に対する好意的な態度が中学校期ですでに過半数を割っていることも見逃せない点である。このことはクラブ加入を回避の方向に向かわせる価値意識の形成が、必修である体育授業の場において行われている可能性を示唆するものである。先に、体育授業は日常生活におけるスポーツの実施を促すことができる重要な機会であると指摘したが、それを効果的に実現させるためには、学習者個々の特性に応じた学習の場が求められよう。本研究結果にもみられるような、体育授業に対する好き嫌いの格差を生み出す要因については、今後さらなる検討が必要である。

3.4 スポーツクラブ加入希望とスポーツ参与の状況

Table3 Wish to take part in the sports event		
Group	Sports event(%)	
	Yes	No
Wish	48.8	51.2
Refuse	17.2	82.8

$\chi^2=36.385$
p<0.001

これまでの議論により、自発的なスポーツ実施は、スポーツに対する肯定的な価値認識によるものと推察された。ここでは、クラブ加入希望者のスポーツに対する態度について、他の活動への参与行動との関わりから検討を試みる。

Table4 Secondary involvement in sport					
Variable	Group	Measure(%)			
		1	2	3	4
Mass media	Wish	11.4	7.2	42.5	38.9
	Refuse	19.7	16.6	42.0	21.7
Family	Wish	22.4	21.2	38.2	18.2
	Refuse	37.8	23.7	33.3	5.1
Neighborhood	Wish	72.6	16.5	10.4	0.6
	Refuse	88.3	9.7	1.9	0.0
Friend	Wish	19.2	20.4	47.3	13.2
	Refuse	31.4	33.3	30.8	4.5

$\chi^2=17.636$
p<0.001

$\chi^2=18.649$
p<0.001

$\chi^2=15.062$
p<0.01

$\chi^2=22.312$
p<0.001

Table3 は地域で催されるスポーツ教室などへの参加希望について、今後のスポーツクラブ加入希望の有無により比較したものである。地域で催されるスポーツ教室等への参加希望においては、加入希望群 48.8%、加入拒否群

17.2%であった。加入希望者は、大学内におけるスポーツクラブのみならず、地域におけるスポーツ活動に対しても関心があることがうかがえる。

また、Table4 はマスコミ接触行動、及び他者との会話（2次的スポーツ参与）の頻度について、今後のスポーツクラブ加入希望の有無により比較したものである（4段階評定）。マスコミ接触行動や他者との会話などにおいても加入希望群と加入拒否群との間には有為な差がみられた。個人の意志決定、つまりスポーツ活動の継続とコミュニケーションとの関連は大きいといえ、この点はスポーツ情報の伝達媒体について報告した古屋⁵⁾の報告と一致している。

これらクラブ活動以外のスポーツ参与状況の結果から、スポーツクラブ加入希望者のスポーツ参与行動は、大学内の活動はもとより地域のスポーツ活動や2次的な参与においても関心が高いと推測でき、自らのスポーツ欲求を満足させるためには、参与の形態や範囲を限定せず、幅広くスポーツと関わっていこうとする姿勢がうかがえる。こうしたスポーツに対する積極的な行動様式は、先に議論されたスポーツに対する肯定的な価値認識の結果と考えられ、いわゆる、内発的動機づけによるスポーツ実施のあらわれといっていよいであろう。

4. まとめ

本研究の目的は、学生のスポーツ実施行動における社会的要因を明らかにすることであった。そのため、スポーツに関する価値意識、過去の体育授業経験、地域のスポーツプログラムへの参加希望、及び2次的スポーツ参与に焦点をあて、スポーツクラブ加入希望の側面から分析を

試みた。

検討の結果、以下のことが明らかになった。

- 1) スポーツクラブ加入の割合は、男女とも各学校期を経るごとに減少していた。特に、中学校から高等学校への移行期にはその傾向が顕著であり、その傾向は大学期にも及んでいる。
- 2) スポーツに関する価値意識については、大学でスポーツクラブへ加入を希望する者の方がより多くの価値を認識していた。自発的なスポーツ実施は、過去の豊かなスポーツ参与経験による価値意識の形成により実現するといえる。
- 3) 過去の体育授業経験により、スポーツクラブ加入希望に差がみられた。体育授業は学習者にスポーツに関する価値意識を植え付ける重要な場を果たしているといえる。日常生活におけるスポーツ実施を促すためには、学習者個々に応じた教育の実践が求められる。
- 4) スポーツクラブ加入希望者のスポーツ参与行動は、大学内の活動はもとより地域のスポーツ活動や2次的な参与においても関心が高く、こうした姿勢はスポーツに対する肯定的な価値認識の結果と考えられる。彼らは内発的動機づけにより、スポーツに参加していると推測できる。

References

- 1) 荒井貞光. 現代っ子のスポーツ生態. 体育科教育 27-6. P19.
- 2) 海老原修. 組織的スポーツからのドロップアウトに関する研究. スポーツ社会学会研究会編, 現代スポーツを考える. 道和書院: 東京, pp107-129. 1988
- 3) 江刺正吾. スポーツ参与の社会化にみられる性差の検討ー児童・生徒・学生のスポーツ意識と行動を中心にー. スポーツ社会学会研究会編, 体育・スポーツ社会科学研究 1. 道和書院: 東京, pp137-160. 1982.
- 4) 船津衛. 自我の社会理論. 恒星社厚生閣: 東京, 1983
- 5) 古屋正俊. スポーツへの関与に及ぼすコミュニケーションの影響に関する考察. 体育社会学会研究会編, スポーツ行動の文化社会学的基礎. 道和書院: 東京, pp99-121. 1979.
- 6) 嘉戸脩・永島惇正・川辺光・荻原美代子・加藤爽子. 直接的スポーツ関与の分析とその要因に関する研究. 体育社会学会研究会編, 体育社会学研究 6. 道和書院: 東京, pp25-56. 1977.
- 7) 桑野豊・池田勝・山口泰雄. パス解析によるスポーツ参与の分析. 筑波大学体育科学系紀要 2: 28-29. 1979.
- 8) 丸山富雄. スペクテーター・スポーツの社会的機能に関する考察. 体育社会学会研究会編, 体育社会学研究 6. 道和書院: 東京, pp. 213-224. 1977.
- 9) 西順一・橘川真彦. 体育授業における運動の楽しさの実態及び生涯スポーツとの関連. 体育社会学会研究会編, 体育授業の社会学. 道和書院: 東京, pp41-62. 1980.
- 10) 沢田和明・布施善克・宮内孝知. Secondary Involvement (間接的スポーツ関与) に関する研究. 体育社会学会研究会編, 体育社会学研究 6. 道和書院: 東京, pp. 69-99. 1977.
- 11) 徳永幹雄・金崎良三・多々野秀雄・橋本公雄. スポーツ行動の予測に関する研究. 昭和57年度文部省科学研究費(一般研究B)研究成果報告書. pp34-95. 1983.
- 12) 横山一郎. 中学, 高校の生活とスポーツ. 桑野豊編著, 現代社会とスポーツ. 不昧堂出版: 東京, pp156-167. 1984.